精霊の羽

夏梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
精霊の羽

【Ｎコード】
Ｎ３９９３Ｐ

【作者名】
夏梅

【あらすじ】
気がついたら、不思議な空間にいたリンカ。漂っているうちに、なぜか目の前に自称精霊の少女が現れて・・・。
とんでもないお願いを引き受けてしまった、ちょっぴりそっけない女の子の話です。

（前書き）

初投稿です。分かりにくい所があったら、すいません！

リンカは何も無い真っ白な空間をふわふわと漂っていた。辺りを見回しても何もなく、下を見たとき自分の体が見えなかったことから、どうやらリンカは人の形をしていないらしい。
先ほど自分のベッドに入った記憶はあるので、きっとこれは夢だろう。そう結論を出してからだいぶ時間がたつ。
ぼうっとしながら漂い続けていたリンカだったが、突然音もなく目の前に現れた鏡を見て驚いた。思わず後ずさったリンカは、鏡に映ったものを見て、鏡に近づくと声を上げた。

「あれ・・・これ、私？」

美しく彫刻の施された鏡に映っていたのは、手で包み込めそうなほど小さい、ほのかに青く輝く光だった。いつもの自分の姿とはかけ離れているが、意外と違和感を感じない。
と、鏡の表面がゆれて中からゆったりとしたドレスを着た、美しい少女が現れた。蜂蜜色の髪の毛に、琥珀色の瞳を持つ少女だった。リンカの国では見たことのない髪と瞳の色だ。
驚いているリンカを見た少女は、目を見開いた。

「あなたは・・・どうやってここへ？」

少女が困惑したような口調でリンカという名の光に尋ねる。リンカは少女の発する人離れした雰囲気に戸惑いつつも、答えた。

「私はリンカ。なぜか、自分のベッドで寝てたら、ここへきたみたいなの。・・・というか、あなたは誰なの？」

リンカの問いを無視して、少女はみるみるうちに顔を輝かせた。ぎょっとしたようなリンカがさっと身を引くと、少女は頬を紅潮させて興奮したような口調で言った。

「あなたが！長い間、待った甲斐があったわ！」

少女は空中でくるくると小躍りを始めた。ついていけなかったリンカは、少女にあわてて尋ねる。

「ちょ、ちょっと、何のこと？」

「ああ、説明がまだだったわ、ごめんなさい。私は精霊のリシャルナ。リシャって呼んで」

リシャと名乗る少女はそういってにっこり笑った。リンカはずいぶん現実的な夢だと思いつつ、うなずく。すると、リシャがリンカの心を見透かしたかのように言った。

「リンカ、これは夢だって思ってるわね」

「だって、夢でしょ。・・・それにしても、こんなはっきりした夢は初めて。まるで起きてるときみたい」

平然としたようにリンカが答えると、リシャがこれ見よがしにため息をつく。そして、むっとしたリンカに、リシャは腰に手を当てて顔をしかめながらびしりと言った。

「やっぱり。まあ、いいわ。夢だと思って聞いてちょうだい」

ずいぶんえらそうな精霊である。そう思ったが、口には出さずリンカは黙って聞くことにした。

「ここはね、世界と世界のはざま。大昔、いくつもの世界が生まれたときに余ってしまった空間があったの。それがここね。今では、私が勝手に使ってるんだけど・・・」
「使ってるって？」
「例えば、一人になりたいときとか、ちょっと考え事をしたいときとか。いつもみたいに来たら、あなたがいて本当にびっくりしたわ」
「あのね、リシャ。好きで来たわけじゃないんだけど」

ずいぶん細かい設定の夢だなあと思っていると、リシャがこちらを軽くにらんでくる。精霊は心が読めるのだろうかとどきりとしながら思っていると、気を取り直したようにリシャはまた話し始めた。

「それで、ここは普通人間は来られない場所なの。でも、あなたはここに夢を介してくることができた。すなわち！あなたには世界を行き来できる特別な能力がある！」

そういってリシャはびしっとリンカを指さした。それに対し、リンカは「はあ」と気の抜けたような返事をする。それが気に食わないのか、リシャは形のいい唇を不機嫌そうに突き出した。

「・・・反応が薄いのね。まあ、夢だと思ってるから普通はその反応よね」
「でも、どうして私に世界が行き来できるなんてわかるのよ」
「私の世界の言い伝えなの。今の言葉で言うと、『世界と世界のはざま、一つの青き光が現れる。その光は人なり。その人、世界と世界を行き来し、我らの光、取り戻す』。ね、まさにリンカのことだと思わない？」
「なんで、そうなるわけ？でも、『我らの光』って何のことなの」
「精霊界の秘宝よ。私はそれを取り戻したいの。・・・実はね、私、精霊界の王女なの」

「あらそう。すごいわね」

リンカのまたもや薄い反応に、リシャはあからさまにむっとする。が、すぐにあきらめたように言葉を続ける。

「とにかく、何百年も前に私のご先祖様は大切に、秘宝を城にまっていたの。でも、ある日突然秘宝は奪われてしまったのよ。魔物たちの手によって！ああ、かわいそうなご先祖様！」

リシャが両手を握り締めて声高に言った。感極まっているのか、琥珀色の瞳が潤んでおり、長いまつげがふるふると震えている。リンカはその様子にぎょっとしつつ、先を促した。

「それで、どうなったのよ」

「え、ああ、それで、奪われたとき秘宝は何個かに割れて世界のどこかに持ち去られてしまったわ。いくら精霊でも世界の行き来はできないから、言い伝えどおりの人物が現れるのを、ずっと待っていたの・・・そこでリンカ！あなたが現れたの」

先ほどから夢とはいえひどく嫌な予感がしていたが、たった今的中しそうである。案の定、リシャはずいっとこちらへ迫ってきた（その分リンカは後ずさった）。

「お願いよ、リンカ。あなたのその特別な能力を使って、私たちの秘宝を探してきてほしいの！」

「うーん・・・べつにいいけど。どうせ夢なんでしょ？」

「本当に！？最後の一言がとっても気になるのだけど・・・。本当にいいのね？その返事に後悔はないわね？」

リシャはきらきらと瞳を輝かせて聞いてくる。これが本当に夢な

のか現実なのか、リンカはだんだんと分からなくなってきていた。もしかすると、自分は今とんでもないことを引き受けてしまったのかもしれない・・・。確信は無いのだが。

「う、うん。ていうか、私何すればいいの？」
「ちょっと待って、今の約束を『精霊の契約』にするわね」

リンカがそれは何かと尋ねる前に、リシャは何か呪文のようなものをつぶやいた。すると、リシャの手の中に真っ白い羽が一枚現れた。リンカが目を丸くしてみていると、リシャはもう一言何かをつぶやく。
羽はふわりと浮き上がると、すっとリンカに吸い込まれた。

「い、今のは何？」
「あの羽が精霊と契約したっていう印なの。それでもし契約を破ると・・・って、リンカ消えかけてるじゃない！」
「え？あ、ほんとだ・・・」

リンカ、もとい光は点滅を繰り返していた。鏡を見ると、光がだんだん弱くなってきている。夢から覚める前兆なのだろうか、と意識が遠のいてきているのを感じながらリンカは考えた。リシャが慌てたように、目を見開いてあわあわしているのが見えて、思わず小さく笑ってしまう。

「ええっ、まだ全部話してないのに！もう、またここにちゃんと来るのよ、契約しちゃったんだか・・・」

そこでリンカの意識は途絶えた。

＊＊＊

外でさえずる小鳥がやけに騒がしく感じる。リンカは眉をひそめながら目を開けた。むっくり起き上がると、見慣れた自分の部屋がある。簡素な机と椅子に、本が詰め込まれた木の棚、母からもらった小さな化粧台。自分は硬めのベッドの中にいる。いつもと変わらぬ光景。さっき体験したのは、夢だったのだろうか。

ゆっくりとベッドからおりて、化粧台の鏡をみる。ありふれた栗色の髪に、これまたありふれたこげ茶色の瞳。何も変わらない、自分の顔がうつっている。

「やっぱり、夢だったのよね」

ふうっ、とため息をついてくしを手に取る。肩までの髪をとかしていると、耳の下に黒いものが見えた。なんだろう、とリンカは髪の毛をかきあげて顔を鏡に近づけてみた。

そこには羽の形をしたあざがあった。

（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました！
よかったら、感想をお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3993p/

精霊の羽

2011年10月8日12時21分発行